SEG
英語多読
授業見学
レポート

英語を学ぶという感覚ではなく 英語の世界に浸って力を伸ばす

SEGは数学の専門塾としてスタートしたこともあり、理数系科目で抜群の指導力を誇る。しかし、近年では英語多読という独特な授業方法を採用した英語の授業でも高い評価を得ている。実際、中学から英語を学び始めた生徒が、中1からSEGの英語多読に通い高2で英検®1級を取得するなど、高い実績がある。今回は、前回の高1に続き、中3の授業にも参加した。

出席をとる際の会話から ネイティブの英語の世界へ没入

SEGの英語多読は、大量の英語の本を読むことでリーディングの力を伸ばす多読パートと、外国人講師がリスニングやスピーキング、ライティングの力をきたえる外国人パートで構成されるのが基本だ。今回の中3クラスは、外国人パートからのスタートだ。

担当のNicholas先生は授業開始5分前に入室。授業開始と同時に出欠の確認に入る。一人ひとりの名前を呼んでから簡単なあいさつを交わしていく。「Hello. How are you, today?」「I' m tired」「Oh, no. Why?」「Because I had sports festival today」「Oh, really? But today' s weather was not really good.....」といった感じだ。

Nicholas先生の英語は、生徒が理解しやすいようにゆっくり、あるいははっきり発音しているわけではない。ネイティブのナチュラルなスピードで話すため、英語が得意ではない我が身には聞き取りが難しい。しかしこのクラスの生徒たちは、先生の話す自然なスピードの英語がほとんど理解できているようだ。もちろん、全員が流暢(りゅうちょう)に答えられるわけではないが、自分の知っている単語をつないで何とか答えている。先生はそれをくみ取り、適切に単語や表現をガイドしつつ、英会話を成り立たせていく。

出欠確認が終わると、近くの机に座っている2人でパートナーとなるよう指示。それぞれにあいさつを交わし、この1週間の出来事などを互いに報告させていく。座席は決まっていないので、いろいろな学校の生徒とパートナーになる可能性があり、仲良くなれるきっかけにもなっている。導入部分ですっかりクラスの雰囲気が英語の世界に染まった。

目的や状況に合わせた英語を とにかく自由に書いてみる

次のパートは、「7-Minute Writing」だ。再びパートナーとの間で、先週の「7-Minute Writing」の内容を話し合わせている間に、先生は添削を終えた先週のwriting paperを返却し、今週のwritingのテーマをホワイトボードにadvertisementと書いた。

「advertisement?」という生徒の声に、別の生徒が「広告？」と日本語でフォローする声も。すると先生が「I like.....」とTV CMのワンフレーズを歌い、生徒はどっと笑って和やかな雰囲気に包まれる。その流れで、パートナーと好きなadvertisementについて話し合う時間をとった後、今日のwriting paperを配り、newspaper advertisementについて書くことを指示した。プリントには以下の3つの選択肢が示されている。

A. Write a newspaper ad for Wallace's window cleaning business.
B. Write a newspaper ad for Wendolene's wool shop.
C. Write a newspaper ad for Wallace's Knit-o-Matic.

つまり、このいずれかを選び、その新聞広告を英語で書くという英作文だ。その前に先生は、「If you write an advertisement what should you say inside the ad, what is good information?」と問いかけ、「Japanese OK. Talk to your partner. Talk to each other」。つまり、どんな情報を載せれば効果的なのかを、日本語でもいいから話し合うよう指示を出す。「良いところを書くんでしょ」「便利で」「価格が安くて」「品質が良くて」「好立地で」「連絡先も」など、Japanese OKとなった生徒たちは日本語で必要な要素を挙げていく。

Nicholas先生は、そうした発言をキャッチしては、ホワイトボードに「good points」「cost」「place/location」「contact information」などと英語でポイントを書いて示し、いよいよ新聞広告を英語で書いていく課題に移った。先生はタイマーを7分にセット。その瞬間にシーンとなり、どの生徒も自分の広告文を真剣に書き始めた。先ほどまでの喧騒(けんそう)が嘘のように静まり返り、教室には鉛筆の音だけが響く。タイマーが鳴ると、writing paperを提出し、パートナーと、どんなことを書いたのかを話し合った。

ここまでの流れで分かる通り、とにかく英語を話す時間が多い。英語を“学ぶ”授業ではなく、コミュニケーションを通して英語の中に身を置き、自分でも英語を使いながら、英語に“慣れ親しんでいく”授業のようだ。

文法事項も英語で学び 映像でリスニングをきたえる

次のパートで、ようやくテキストを使う授業になる。本日のテーマは形容詞と副詞に関する文法事項だ。しかし、テキストには一切日本語はなく、またadjective（形容詞）やadverb（副詞）といった文法用語も示されていない。正しい文章を正誤で答えさせる問題や、空欄に適切な単語を記入する問題などを通して、副詞と形容詞の使い分けを感覚的に学んでいくわけだ。

Nicholas先生は生徒と一緒にテキストの文章を読み上げ、文字としてだけではなく音としても正しい英語を示していく。また、文章の内容に関連した話題で生徒の興味をかきたて、表現の幅を広げることもある。noisilyという言葉が出ると、「僕は長く日本にいるからラーメンをnoisilyに食べることができるけど、この間ラーメン屋で一緒になった外国人は、他の日本人と同じようにnoisilyに食べようとしても、なかなかできなかったよ」と言って（当然だがすべて英語だ）、生徒の関心や集中をうながしていく。

テキストを使った学習の時間が終わると、みんなで海外アニメを観る時間に入る。先週までの内容をパートナーと英語で確認させた後、今週のシーンをプロジェクターでホワイトボードに映し出す。

海外アニメを観ると言っても、ただ流すだけではない。キャラクターが一言話すたびに映像を止め、「どう感じた？」「このセリフは何て言ってる？」と英語で質問したり、直前の場面での印象的なセリフを繰り返させたり、休むことなく生徒に英語を聴かせ、話させ、考えさせていく。分かりにくい表現が出てくると、ホワイトボードで説明する。たとえば、アニメで「He gets life」と話していたら、get life＝prisonと書いて、終身刑を意味することを伝えていく。

最後に今回のシーンの内容を300語くらいで解説したプリントを配り、「4分間で読んで、分からないところにはアンダーラインを引いて」と指示。また静かな時間が訪れる。4分のタイマーが鳴ると、再び今日のアニメのシーンを最初から流して、映像の時間は終了した。1文ずつ細かく学習し、最後にプリントで大まかな流れをおさえた後に、もう一度映像を観ることで、しっかりとした理解につなげていくようだ。

採点を終えたホームワークを返却してNicholas先生の外国人パートは終了し、20分間の休けいに入った。

じっくりと読書する時間の後に シャドーイングで英語のリズムも体得

多読パートの担当はSEG代表の古川先生だ。先生が教室に入ってきても喧騒は変わらずだが、その中で先生に「癒された」と本の感想を述べたり、「このキャラクターの本が読みたい」とリクエストしたりしている。相変わらずSEGらしい自由な雰囲気だ。

授業開始時刻になって基本英作文のプリントが配られると、すぐに教室はシーンとなる。このあたりのメリハリはしっかりしている。どうやら基本英作文プリントの提出が出席確認の代わりになっているようだ。

その後は、各自が読むべき本の読書に入っていく。*The Princess Diaries*や*Magic Tree House*といった5,000～6,000語のシリーズ作品や、20,000語以上の*Cupcake Diaries*、ロンドンの観光案内、絵本などさまざまだ。それぞれの興味や関心、レベルに応じて、自分が楽しく読める本を読んでいる。付属のCDを聴きながら読んでいる生徒もいる。中1・2のうちはCDの音声に合わせて声を出しながら読む生徒が多いが、中3になると声を出す生徒はいない。最上位クラスということもあるだろう。

生徒が多読をしている間、古川先生は提出された基本英作文プリントの採点を行い、終わったものから、文法的なアドバイスを加えながら生徒に返却していく。

1冊読み終えるごとに、生徒は「読書記録手帳」に本のタイトルと語数、累計語数などを記入し、簡単な感想を書きこむ。古川先生は読み終えたと手を挙げる生徒の机に行き、感想を聞いてから、次に読む本を探して持ってきてわたしていく。

18：55の授業開始から読書に集中する時間が1時間以上も続く。普段の学校生活の中では、これだけの時間英語の文章に向き合う機会はあまりないだろうから、かなり貴重な時間と言えよう。

授業終了10分前になると、先生は「では、この辺で読むのを止めて、フラダンスの意外な歴史を一緒に音読しながら学びましょう」と、全員に1冊ずつ*THE HULA*を配り、CDを流し始めた。

流れてくる音声のすぐ後から間を置かず、まったく同じように繰り返し音読していく。シャドーイングと呼ばれる学習法だ。古川先生も含めて、みんなの声が教室内に響く。多読パートにおいても、単に黙読するだけでなく全員で音読する時間を設け、英語のリズムや発音のトレーニングをしているというわけだ。多読という呼び名からは想像もつかないほど五感を活用して英語に親しんでいく姿勢がうかがわれる。

シャドーイングが終わると、先生は「フラダンスが禁止されていた時期があったんですね」とまとめ、「では、今日はこれで終わりです」と締めくくった。

休けいをはさんで3時間の長丁場ではあったが、授業を受けているというよりも、英語の世界にどっぷり浸かるという表現が相応しいような時間だった。

※英検®は、公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

SEG中3英語多読

受講生の声

中1から通っている生徒さんもいればこの春から通い始めた生徒さんもいて、受講期間はみんな違います。それぞれが現在英語多読に感じている魅力を教えてもらいました。

楽しく授業を受けられ 力もついた

兄が受講していて「楽しい」と言っていたので、私も中1から通っています。その言葉通り、あまり授業という感覚がなく楽しく受けられることが一番の魅力です。外国人が話す自然な英語表現を学べますし、映像を観ながら言葉の意味を理解したり、一つの画像からみんなで物語を作ったりするなど、興味深く学んでいます。今では読む速さも上がっていますし、スピーキングの力もついてきました。

◆R.N. さん（桜蔭）

英語多読を通して 自分の世界が広がった

母の勧めで春期講習から受講していますが、現在では自分が楽しいから通っています。宿題は多くないですし、外国人パートではみんなとおしゃべりしながら授業が進んでいくため、とても心地よく受講できます。もともと読書は好きで、多読でも読みたい本を読んでいますが、ときどき自分では絶対に手にとらない本を選んでくださるので、自分の世界が広がっていく感覚がありうれしいです。

◆S.I. さん（渋谷教育渋谷）

ネイティブの英語を 聞き取る耳が養われる

宿題を計画的にこなすのが得意ではなく、自分のペースで勉強できるSEGを選びました。実際、テスト前は貸し出しの洋書を少なくしていただいたりしています。多読パートと外国人パートで、同じ表現が異なる状況で出てきたりするため、理解が進みます。5,000語くらいの本が読めるようになった中2の終わり頃から物語の面白さにつられて読書量が増え、英語の力が急に伸びたような気がします。

◆K.N. さん（女子学院）

https://www.seg.co.jp/　03-3366-1466　［月～金］14:00～21:00　［土］13:00～21:00　〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-19-19

中学1年～大学受験 科学的教育グループ SEG®